

六稜合気会

「合気道と私」

——北野高校時代の出会いとその後——

氏名：水戸川 正美（83期）

1. 入部の動機

どうして合気道部に入ったのだろうか？ 改めて思い出してみると、高校入試の合格発表を見に来た時、色々なクラブの勧誘合戦で合気道部の勇姿を見たのが発端だったような気がする。幸いにも合格し、喜びと安心感の中で、白い柔道着に紺色の袴がすごく印象的で格好良く目に映った。高校に入ったらこれをやりたいと考えていたものが有った訳では無く、合気道が何かも知らないのに、きっとその格好良さに惹かれて入部したのだと思う。

2. 部活生活

練習は早朝と昼休み。家が今の千里中央に有って、その頃は地下鉄も通っていなかった。最寄りのバス停から阪急南千里駅に出て十三まで通っていた。朝は5時台に家を出ていたように思う。起きるのが辛く、親に起こされ父親の通勤と一緒に通っていた。冬の朝は特に辛く、練習に遅刻することもあり、先輩から受身100回の罰を与えられたことを覚えている。

日頃の練習は、体育会系で良くあるスパルタ方式では無かった。阿部先生が時に指導はしてくれるものの、ほとんどが先輩方の練習計画に基づいたもので、82期の先輩は皆優しく紳士・淑女であった。合気道部の部員は先輩とも後輩とも、みんな仲が大変良かった。そのお陰でクラブ生活が辛いと思ったことは一度も無い。

但し、先輩紳士方の中には柔道着を洗濯される周期が非常に長い方が居て、部室の臭気の酷さはもとより、特に夏場の練習スタート時の臭いには閉口した。自分も同じ様なもので、人のことを言えた義理ではない。きっと84期の後輩達も同じ思いしていたことだろうと推察する。

その点、先輩淑女方は常に爽やかな香りで、せめてもの慰めであった。

3. 合宿の思い出

クラブ生活で一番思い出深いのは、夏の合宿である。単身赴任しているせいで、こちらにはその頃の写真も無く記憶だけになるが、兵庫県の宝殿のお宮(?)で何日かの合宿をした。確か、先輩・後輩の高校生だけ、それも男女一緒である。

朝起きて裏山に登り、食事をしてから練習、昼食を取って又練習、はて？夜は何をして過ごしていたのだろうか。消灯は早く、クーラーは論外、扇風機すらも無い酷暑の中で、日中の練習で疲れているとは言え、蚊、いびきそれに歯軋りと色々な障害と闘いながら、それでも良く寝られていたものだと、今にして思えば驚嘆である。

自分が親となって始めて思うが、もしわが子が、保護者の引率も無い高校生同士で、それも男女一緒の合宿に行きたいと言ったら許可することが出来るか自信が無い。きっと反対するに違い無いと思う。何と良き高校生活を送られたことかと、改めて感謝している。

4. おまけ

合宿の帰り、又は文化祭演舞の後で、先輩・後輩が梅田に打ち上げに行った。行く場所は様々、ビアホールの「ミュンヘン」、お好み焼きや、更には喫茶店、学生服で平気であり、ビールも飲まないのに、2～3時間平気でしゃべっていたと思う。

受け入れてくれる店の寛大さに感謝だが、それを当然のこととし不思議に思わなかった先輩諸氏の伝統・文化は何と偉大であったことか。

5. その後の交流

私は就職して九州で勤務することになった。同期の中川さんも九州勤務となり、独身の頃から交流し、私が北海道で勤務していた頃にも、中川さんが北海道の工場に出張された折、千歳で一緒に会食する機会に恵まれた。結婚してからも互いの家に泊めてもらう交流が続いている。更に北海道勤務時代、同期のマドンナこと田中さん（旧姓福井さん）が、学会で北海道に來道された際にも食事を共にするチャンスに恵まれた。

東京に転勤になってからは、東京に居を構えられていた中川さん、田中さんと交流する機会が増え、藤枝に住む四居さんも参加されるようになった。東京には期せずして、仲の良かった82期先輩達も住まわれていることが分かり、10年近く継続的に同窓会を開催している。

6. 感謝

青春時代のクラブ生活を共に過ごした友達・先輩と、途切れることなく交流を深めることが出来ている。会社とは無縁の私生活で、時に仕事の話題であったり、時に家族のことであったり、言いたいことが言い合える、そんな人を持っているのは合気道が結んでくれた縁だと大変感謝している。

新たに東京合氣会が発足することになった。東京での勤務が後何年有るのか分からないが、更なる出会いが自分にも皆さんにも価値あるものにしていきたいと思う。